

染による死亡者数は200万人とも言われている。特に妊婦がマラリアに感染しやすい。これは、マラリアに感染した赤血球 (IRBCs) の受容体が胎盤にあるからで、その受容体は硫酸化度の低いコンドロイチン硫酸 A (CSA) クラスターであることが知られている。これまでの研究で両者の相互作用については知られており、parasite protein である VAR2CSA が介在することや CSA の詳細な分子構造もわかっているが、結合のメカニズムはわかっていなかった。今回 D. C. Gowda らは、VAR2CSA にある6つの異なるドメインを持つ Duffy binding like ドメインが、単独にこの結合に関与していることを明らかにした。結合には、IRBCs, VAR2CSA と CSA をもつプロテオグリカンが不可欠であると結論していた。本発表は筆者の研究対象であるプロテオグリカンに関する分子レベルでの話であり、現実的な局面に対峙した研究で、たいへん興味深く聴いた。マラリアは熱帯地方の風土病のように考えられているが、温暖化が進めば中間宿主であるマラリア蚊が緯度の高い地域にも生息し始めるので、対岸の火事とはいえない。現在困っている人がこれだけ多いことで、関連研究の遂行は焦眉の課題といえる。研究テーマの選択は研究者によってさまざまだが、人助けが動機になっている研究はぶれない。

International Symposium on Seafood Processing Technology and Safety Control System に参加して

岐阜医療科学大学 保健科学部 永井 慎

中国の青島で、10月31日から11月2日まで開催された International Symposium on Seafood Processing Technology and Safety Control System に参加した。本会は水産食品の安全に関する国際学会であり、中国の水産食品関連では、有名な青島海洋大学が、初めての国際学会を主催している。学会は半島の先近くにある青島大学の新校舎にて行われ、青島海洋大学は非常に歴史のある大学であった。近年、最新テクノロジーに対応するために新校舎を設立し、キャンパスを訪れると日本以上に近代的な建物ができており、施設も充実していることに驚いた。学会前日には、ポスター会場での準備および登録があり、初日には、オープニングセレモニーとウェルカムレセプションが行われ、世界各国の水産食品安全に関する特別講演が行われた。

その後、各会議は各ホールに分かれて行われた。中国での水産食品分野では、初めての国際会議であり、当初思っていたよりも大きな学会であった。会場には、世界の各水

産食品の安全に関する分野では、第一線で活躍する研究者

が多く参加しており、貴重な話が数多く伺えた。本学会への参加者は13カ国の約600人程度であり、75%が中国の研究者であった。そのためか、日本人と見つけると中国全土の数多くの研究者が、話かけてくる機会が多かった。

研究動機の重要性を改めて考えさせられた。

今回のシンポジウムは、冬の日本を離れて亜熱帯で開催されるということで、夏物をトランクに詰め、たいそう期待して乗り込んだ。確かに外は暑いのだが、この準備はほとんど役に立たなかった。18℃という学会会場の寒さにどの参加者も震え上がり、外に出ると、「寒いので我慢できず外に出たと」という話題でもちきりであった。サービスのつもりで冷房を効かせてくれているようなのだが、体調を崩す人も出始め、私も途中半日寝込んでしまった。実はこの会場に限らず、町のどこに行っても建物の中は極端に冷房が入っていた。

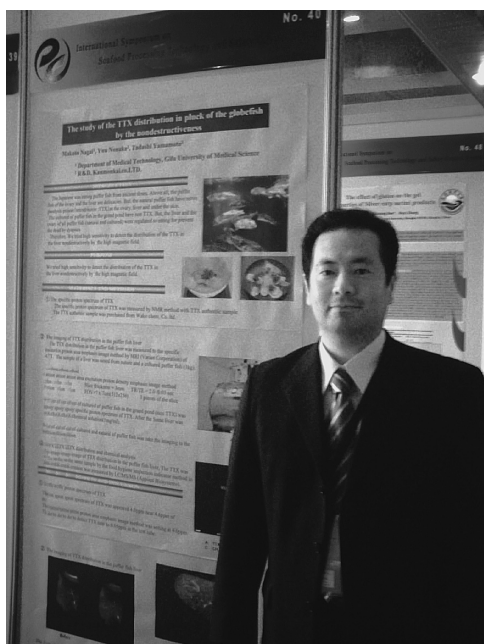
今回も有益な情報が十分得られた。インターネットで大量の情報が即座に手に入る時代になっても、顔を突き合わせて話す話は何倍もの情報量を持つ。次回(21回)の本シンポジウムは、2011年7月にウィーンで開催される。よい研究結果を出して、またこのシンポジウムに参加したい。

最後になりましたが、本シンポジウム参加の機会を与えていただき、ご援助いただきました(財)農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。

ポスター発表する時間、討議する時間も十分に用意されていた。著者は開催2日目に“The study of the TTX distribution in pluck of the globefish by the nonde-



国際学会会場 (オープニングセレモニー)



ポスター発表中の本人

structiveness”という演題で、ポスター発表を行った。ポスター発表は座長がつき、討議の時間設けられていたため盛況に行われ、著者の発表にも50人くらいの方から質問、助言を頂き、充実した発表になった。

著者らは、研究用の高磁場MRIを利用して、非破壊的に迅速に安全検査を確立したことを発表しており、各国の研究者に実用的で画期的だと高く評価して下さった。特に



昨年のオリンピック青島会場となったシンボル

中国の農林水産省は、今後、国内外の食品安全検査に利用可能であるか検討したい意向を示してくれた。

今後さらに研究を進め、3Dでの迅速な毒検出方法が必要であると感じた。開催2日目の夕方には、交流会が開催され、参加者との交流を深めた。交流会には青島料理を前に、中国式の酒での挨拶があり、皆の今後の発展を祝ったものであった。次回の学会は、中国の上海で行われ予定であり、著者も機会を得ることが出来れば、是非とも参加したいと思う。

最後に、国際会議参加にあたり、助成を賜りました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、御礼申し上げます。

国際会議出席報告書

東北大学大学院理学研究科 中村葉子

参加学会 5th Symposium on Plant Neurobiology,
2009. 5. 25-29, Florence・Italy Spedale degli Innocenti・
The Society of Plant Neurobiology・Florence・Italy

5th Symposium on Plant Neurobiology に参加して

2009年5月23日から31日まで、イタリア、フィレンツェにて、5th Symposium on Plant Neurobiologyが開催された。本学会は、Society for Plant Neurobiologyが毎年、世界各国で開催している国際学会で、今年で5回目である。植物の応答(sensing)に関心を持つ、様々な背景を持った研究者が集まり、かなり幅広い分野の発表が行われる。大規模な学会ではないため、通常は同じ会場にいないような発表者の発表を聴くことになるが、こちらの発表



学会会場にて

も様々な分野の研究者に聴いてもらえるチャンスでもある。植物のsensingに関して、分子生物学、生化学、植物生理学、化学生態学など、いろいろな切り口の発表があり、